

5

秦人の都城遺跡

角道 亮介

○鈴木 それでは引き続き、午後2番目の発表に移りたいと思います。2番目の発表は、駒澤大学の角道亮介先生になります。よろしくお願いいたします。

○角道 続きまして、駒澤大学の角道がご報告させていただきます。画面を共有します。失礼いたします。

それでは、始めさせていただきます。私の報告ですが、「秦人の都城遺跡」ということで、秦の都城というものに注目して、最近の発掘成果を基にご報告させていただければと思っております。画面は、雍城遺跡の発掘風景でありますけども、最近の調査によっていろいろ分かったこともあります。雍城が秦の都城であるということは、皆さんも既にご承知のことと存じますが、中国の都城というものを考える上で、秦及び前後の時期の遺跡の発掘調査が大きく意味を持つのではないかとということで、ご報告させていただこうと思います。

改めて私から申し上げることでありませんが、早期秦文化の遺跡が見つかってくる中で、秦の都城遺跡というものも幾つか見つかってきております。文献によれば、秦の都城は全部で9カ所あり、つまり8回の遷都を行ったということのようです。本日の飯島先生や梁雲先生のご発表にもありましたが、犬丘という場所は、おそらく天水礼県付近ということで、大堡子山遺跡がそれに当たるのではないかとわかっております。ここから始まった秦の都でありますけれども、文献記載によりますと、秦の文公の時代に汧渭の会というところに遷り、寧公あるいは憲公、両方の書き方があるようですが、その時代に平陽に遷った。これは都城遺跡としては確認できていないところであろうと思われます。明らかになるのは、その後の徳公元年（紀元前677年）に遷都の記載がある雍城遺跡でありまして、これは現在の宝鸡市鳳翔県でたくさんの遺跡が見つかっております。本日私がお話しさせていただくのも、雍城が中心となります。

文献には、その後もやや時間をおいて霊公元年に涇陽に遷ったとありますが、これもなかなかここだという都城、すなわち大型の建築遺構をもつ遺跡というのは見つかっていないと思われます。ただ、その後の献公2年の櫟陽に関しては、近年調査が進んでおりまして、幾つかの宮殿をもつ、大型建築遺構を有する拠点

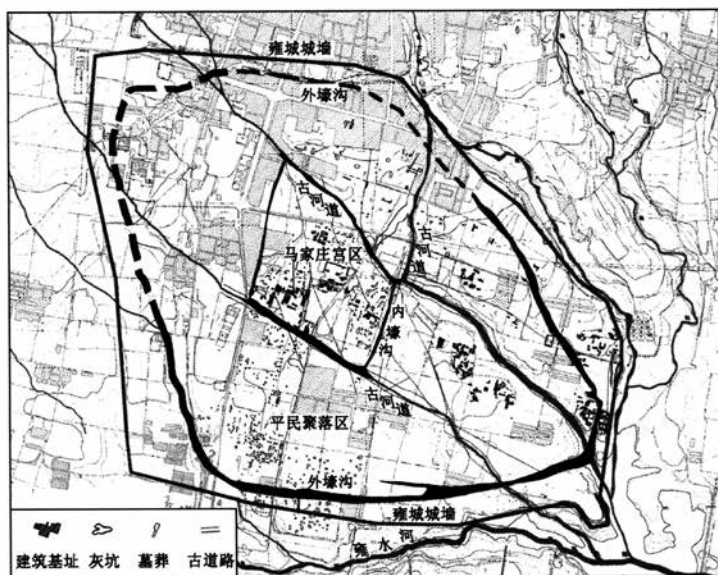
の在り方が、発掘によって明らかになりつつあります。また、孝公12年（紀元前350年）には咸陽に遷ったということで、これも近年の調査によって、いろいろな遺構の存在が明らかになりつつあるところです。

本日お話しさせていただく雍城遺跡ですが、これが雍城遺跡の平面図であります（第1図）。現在の鳳翔県の南側にあります。そこから少し離れた西側に、秦公1号墓を含む大墓が集中しております。雍城の城壁というのも確認されておりまして、西側の壁の残存状況がよく、城壁で囲まれた都城であります。

最近、調査がなされた血池遺跡、祭祀遺跡がある遺跡は、主に漢代の遺構ということですが、少し西側の小高いというか、かなり斜面自体は急だと思いますが、山の上にある遺構です。遺跡の主な分布はこんなところであろうと思います。

血池遺跡は祭祀を行う場所であった。これが漢代に主に使われていたと考えられるようですが、今日のテーマである雍城の継続年代という意味でも、重要なかなと個人的には考えております。

それで、この雍城遺跡（第1図）なんですけども、雍城遺跡の調査に当たってこられた陝西省考古研究院の田亜岐先生らの長年の調査によりまして、その時期がだんだん明らかになってきたということが近年の報告で指摘されております。



第1図 雍城遺跡の環濠と城壁
(田亜岐 2015 より転載)

田先生によりますと¹、雍城遺跡は大きく3期に分けることができるようでして、第1期、2期、3期というふうに分けるならば、1期の中心であった宮殿区は、雍城の東側にある瓦窯頭という村にあった宮殿と考えられるとのこと。中庭がありまして、ちょっと形は違いますが、周代の宗廟といわれる遺跡にもある種似ているような面も見えます。

第2期になると、遺跡の中心が馬家荘に移ります。先ほど、梁雲先生の報告にもございました通りです。これはおそらく宗廟であろうと考えられておりまして、真ん中に多数の祭祀坑があるということは、以前の発掘で既に指摘されています。

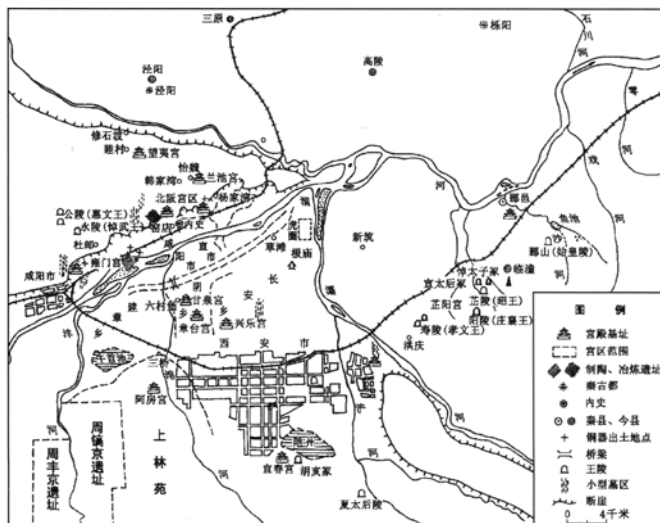
以上が第2期の状況です。第3期の中心として田亜岐先生らが考えるのが、やや北に位置する姚家崗、鉄豊、高王寺の宮殿区だということです。姚家崗遺跡からは、実は青銅製の建築部材なども出ておりますが、どうも姚家崗だけ少し古い時期から大型建築遺構があったようでして、馬家荘と一部重なる時期があるようです。姚家崗の後半と、それから、鉄豊、高王寺に関しては、時期的には第2期の後、つまり第3期に位置付けられており、雍城内での中心地はこのように変遷したということが指摘されています。

今日この後ご紹介する豆腐村という遺跡があります。当地は位置的にかなり端ではありますが、3期の宮殿区内に位置するといってよさそうです。多くの出土資料の時期も、鉄豊、高王寺の時期にあたり、3期が中心の遺跡になるということですが、その年代がいつなのかということが一つ問題になると思います。

次に城壁ですね。西城壁では、版築できれいに整えられた城壁の断面が見えておりまして、かなり大規模な壁があります。これが雍城の城壁ですが、その築造時期が問題になります。田亜岐先生が行った先ほどの3期区分によりますと、この城壁の出現時期は決して古くなく、むしろ極めて遅いそうです。このことが非常に重要であろうと思います。

先ほどお話したとおり、第1期は城内の東側に中心地があった時期ですが、田亜岐先生によると、その時期は城壁はなかったということになります。瓦窯頭のあたりにあった建物が宗廟だったとして、その宗廟を取り囲むように人工の水濠を造ったということが指摘されておりまして、当時の拠点というものは、決して城壁で守るものではなかったとされます。それがだいたい年代としては、徳公から成公の頃にあたるのだということを田先生はおっしゃっておられます。

1 田亜岐 2015「秦都雍城考古録」『大衆考古』2015年第4期。



第2図 咸陽城遺跡の遺構分布
(王学理 1999『咸陽帝都記』三秦出版社より転載)

第2期がそれに引き続く時期です。馬家荘に宮殿区が移ったこの時期は、およそ穆公から恵公の年代に相当すると考えられていますが、この時期も実はまだ城壁はないということのようです。二重の水濠がありまして、皆さまのお手元の図(第1図)では、馬家荘を囲うように河川を南北につなげた環濠が内側に一つあります。そのさらに外側を囲うような外堀があるということが指摘されています。そして、馬家荘の1号や3号を宗廟と関連する遺構と考えるならば、この時期、宗廟があり、秦の祭祀がここで行われたということになります。

第3期ですが、第3期こそが城壁の時期であります。紀元前490年から紀元前350年というのが第3期に当たるということのようですが、城壁があり、なお、明らかではない部分も多いのですが、先ほど申し上げた鉄豊や高王寺のあたりに宮殿区が移りました。この時期に城壁が造られたという指摘は非常に重要です。

少し話が飛ぶのですが、咸陽城(第2図)の遺跡に関して簡単に申し上げます。ご存じのとおり、紀元前350年、つまり、孝公12年に秦が遷都したという記載が文献には見られます。注目すべきは、多くの宮殿が見つかり、多くの手工業遺跡が見つかったなかで、現在に至るまで外城は発見されていないということです。自然地形で都市、あるいは都城の区画というものが見えたとしても、それを明示するような外城というのは、現状、まだ咸陽城では見つかっていないということになります。宮殿区を囲う壁をもし内城と呼ぶならば、内城は検出されて

いるという報告がありますが、外城はないということが、現状まで一貫した考古学的な状況だと思われます。

中国の都城の展開というものを考えたときに、外城がないというのは、非常に不思議な状況です。黄河流域、あるいは華北地域の大規模な都城という意味でみれば、新石器時代の陶寺遺跡の段階で、内城と外城の二重の城壁というものが既に発見されています。それはある意味では、殷代前期の鄭州商城に引き継がれておりまして、鄭州商城でも二重の城壁というものが確認されています。「外城かどうか」の判断は保留するとしても、二重の城壁があるという意味です。

一方で、初期王朝時代の拠点には外城がないものも幾つもあるわけです。二里头遺跡や殷墟遺跡、周原もそうですが、外城はございません。先ほどの雍城に目を向けましても、雍城2期は城壁がない。水濠はあった、溝はあったということですが、明らかな城壁はないということになります。

それが3期になると、外城が造られ、後の咸陽城の頃にはまた外城がなくなるという、秦の都城の最後のほうの変遷を見たときに、少し異様な変遷の仕方をするというのが非常に問題ではないかと考えております。そもそも雍城の2期と3期というのをどういうふうに位置付ければいいのかというようなことをこれから考えたいと思います。

まず、外城について一般的な説明をいたします。『周礼』の考工記に見られるような都城のプランがいつどうやって成立したのかということは、ずっと研究者が気にしていたことでした。例えば、宮崎市定先生は、1933年に既に早くも都城の発展のモデルを作っておられます²。もともとは内城のみの城が存在して、それが二重の城郭に移り、そこの中から君主がいない拠点においては、外城のみの城が出てくるというようなモデルを提唱されたわけです。しかし、考古学的な発掘による現状の資料では、こういうモデルはおそらく成り立たないであろうと考えております。

外城を持つ持たないということに関しましては、既に許宏先生が指摘されております³。許宏先生はつい先年、「大都無城」という考えをご提案されまして、私も基本的には、この考え方で正しいのではないかと個人的に思っております。許宏先生の「大都無城」は、早期王朝時代においては、大規模拠点では外城はないのが普通であるという考え方です。大規模でない中規模、小規模の拠点をどのように区分するかという問題は別に細かく議論しておられますが、とにかく中規模、

2 宮崎市定 1933「中国城郭の起源異説」『歴史と地理』第32巻第3号。

3 許宏 2016『大都無城 中国古都の動態解説』生活・読書・新知三聯書店、許宏 2017『先秦城邑考古』金城出版社。

小規模では城壁を造るものは存在するけれども、大規模拠点ではないのだというご指摘です。その理由として、早期王朝時代は、都市と都市が争うような時期ではないので、都市を守る壁というのは必ずしも必要なかったのだという説明がなされたと理解しております。

そうしますと、先ほどの鄭州商城の時期には外城があるわけですが、それは例外的に都市間抗争が頻発する不安定な時期だったのだと。だから、ここには外城があるのだというふうに指摘しておられます。

そういう視線で秦の雍城を見ると、もう少し見えてくるものがあるのではないかと、今私は考えております。外城が存在しないことの理由については、私は別の考えがあるのですが、現象として、この時期の大型の都城に城壁がないということを経験的に評価するべきではないかと考えておまして、その視点に立って雍城を見ると、年代がやはり問題になるのかなと思っております。

雍城の時期区分について、先ほどの第1期、第2期、第3期というふうにお伝えしましたが、それぞれの時期に対応する公の在位年代が田重岐先生によって明確にされておりまして、そこから西暦もおおよそ推定されるということです。では、なぜ1期が紀元前677年からなのかということですが、これは文献に、徳公元年に「初めて雍城の大鄭宮に居」という記載がありまして、徳公元年が紀元前677年であることから導かれた年代だと思われます。

悼公から孝公の在位にあたる紀元前490から紀元前350年が、第3期の年代とされます。「悼公二年に雍に城す」という記述がありまして、これは雍城に城壁を造ったという意味で解釈され、それが悼公2年の紀元前490年であるということから、第3期の開始年代が前490年とされたのであらうと思います。紀元前350年までということは、これは孝公12年に咸陽に移ったという記載があるので、それまでの年代が与えられたと考えられます。つまり、第1期、第2期、第3期の年代というものは、考古学的な議論、あるいは考古資料、年代が記された青銅器の資料から検討されたというよりは、文献と考古遺跡の解釈との関係で決定された時期であるというふうに、私には見えました。従って、いちど文献の記載を離れて考古資料だけで見てみた場合に、果たして雍城の2期、3期というものは、いつぐらいの年代にあたるのかということをもう一度考える必要があると思います。

というわけで、第3期の年代ですが、まずは高王寺の年代であります。高王寺の宮殿があったとされる宮殿遺構のすぐそばから窖藏が発見されておりまして、そこから出てきた青銅器が年代を決める一つの根拠になると思います。一部に秦らしくない資料もありますが、おおよそ戦国前期ぐらいの年代と考えられます。特

に敦などは戦国中期くらいでもいいのかと思いますが、そうすると、かなり時期的には新しい。戦国の前期、中期の実年代をどこにおくかというのは研究者でそれぞれだと思いますが、おおよそ戦国中期とみますと、それこそ紀元前350年の咸陽への遷都の時期に平行して、この高王寺の青銅器が出てきたとみても矛盾はない年代です。

先ほど出てきました豆腐村ですが、そこから瓦当が大量に出土しました。葵文瓦当や雲文瓦当が大量に出てきておりまして、これはやはり咸陽城から出ました瓦当と非常によく似ていると思われます。そこに年代差を考えるかどうかというところが最大の問題になると思いますが、私は、雍城が紀元前350年で廃絶されたという考え、すなわち鉄豊、高王寺の宮殿区が咸陽遷都とともに廃絶された、あるいは使われなくなったというのは、多少問題がある考え方だと考えます。むしろ、第2期から第3期の変わり目を咸陽遷都と関連させて議論すべきではないかと考えております。孫家南頭村から出ている瓦当は、有名な蕪年宮の文字があります。これは雍城の城内ではありませんが、秦代の始皇帝の時代、咸陽遷都後にも雍城が何らかの拠点として機能していたということは間違いないと考えます。城壁の年代というのは大変難しいと思いますが、雍城3期の城壁の出現を遅らせて、雍城2期の年代を咸陽城に前接する年代として見られないかと、私は今考えております。

そうやって見ますと、雍城3期の時期を多少後ろに下らせることができると考えます。つまり、咸陽城へ宗廟としての機能が移行したとほぼ時同じくして、雍城に城壁が造られたというふうに解釈することが可能であると思います。むしろ、殷代、周代、あるいは二里头時代からの伝統という意味で考えれば、城壁を持たない拠点というものを積極的に評価して、雍城もその伝統に位置付けられるのではないかと、その延長線上に咸陽城もあるのではないかと考えています。雍城が城壁を持たない2期から城壁を持つ3期になり、まだ咸陽城として城壁を失うという、そのような異様な変遷よりも、雍城における宗廟としての、あるいは都城としての機能が失われた後の変化として城壁を持つようになったとみたほうが、理解がスムーズなのではないかと考えております。

私の報告は、簡単ではありますが以上になります。どうもありがとうございました。

○鈴木 角道先生、どうもありがとうございました。